ふれあいつながり かわら版

姫路市教育委員会
学校指導課
小中一貫教育・ICT教育推進係
(079)221-2120

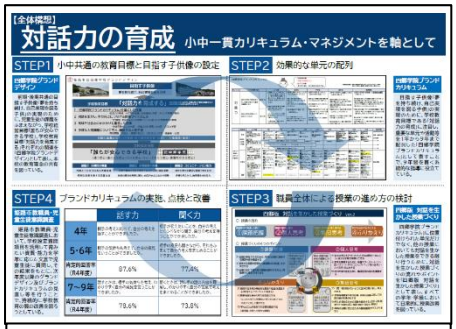
離れていてもできる小中一貫教育！
四郷学院　自主研究発表会

令和五年九月二十九日(金)四郷学院にて、義務教育学校自主研究発表会が開催されました。講師として姫路大学教育学部長　長谷浩也教授を招聘し、「対話力の育成　小中一貫カリキュラム・マネジメントを軸として」をテーマに、5つの学級で授業公開と全体会が行われ、市内外合わせて230名を超える参加者がありました。

四郷学院は前期課程と後期課程の校舎が300mほど離れていますが、研究会では「離れていてもできる小中一貫教育」を合言葉に、四郷学院が取り組んでいる校内研修（授業研究）、職員会議、各種行事などが紹介されました。全体会では、カリキュラム・マネジメントの重要性について、PDCAサイクルに基づいた研究発表が行われました。このサイクルは、自ブロックのブランドカリキュラムを目の前の子供の実態に合わせて改善していく際の参考になりますので、ぜひご活用ください。（図1）

長谷教授の講演では、「子供達が今何と向き合って対話しているのかをみとることが大切である。」「自己内対話をすることで自分事としてとらえ、振り返りが深くなる。」「授業のねらいによって振り返り方を変えることも大切である。」とご示唆をいただきました。（図2）

図1



PDCA サイクルをもとにした四郷学院の研究概要

海から始まる学びの一歩を、児童の主体性につなげて　家島小学校の挑戦

令和五年十月十三日(金)家島小学校にて、第72回全国へき地教育研究大会兵庫大会が開催されました。北海道から沖縄県まで小学校、中学校、義務教育学校で勤務されている先生方が100名以上直接参加されただけでなく、オンラインで全国各地に中継もされました。

公開授業の総合的な学習の時間「家島うみの時間」では、「家島のうみを超えて魅力を伝える」をテーマに4年生から6年生が縦割り班で4グループに分かれて取り組んだ学習の中間発表がありました。単元の最終的なねらいは「家島の魅力を発信し、家島の未来を考えること」ですが、中間発表では「3年生を自分たちのグループにスカウトすること」もねらいにあったので、3年生が興味を持つように工夫された発表となっていました。

分科会では、姫路市の先生方がファシリテーターとなって、参観した授業や研究発表を受けての意見交流が行われました。参観者からは、「教師の思いや願いが明確になっているので、子供にもそれがしっかり伝わる授業であった。」「子供は自分事として自分の学びをしており、自分の言葉で表現できていた。」など取組を称える言葉が飛び交っていました。家島小の子供達が先生方や地域から愛情たっぷりに育まれていることを全国に向けて発信する素晴らしい研究大会となりました。

12のグループに分かれて意見交流

図2

学びの再構成のための振り返り
- めあてに対して書く
- 指定した言葉で書く
- 適用題をする
- 再度実演する
- 宣言する
- フリーで書く

姫路大学　長谷教授

授業者の想いやねらいに立脚した教職員のみとりを通した授業研究（琴陵中ブロック）
城西小学校　4年生　国語科【ごんぎつね】

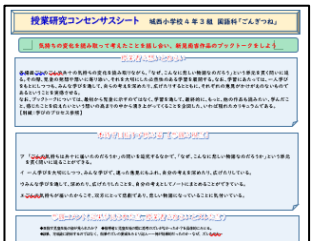
令和五年十月十日(火)に、城西小学校にて小中一貫教育授業研究会が、兵庫教育大学大学院　筒井茂喜教授を招聘して行われました。

琴陵中ブロックでは、「授業研究コンセンサスシート」を活用することで、「授業者の想いとねらい」と「本時で目指す子供の姿」を手元に見ながら授業を参観する取組を進めています。

事後研修では、授業者の足立先生から、「自分がどんな授業展開をしたいか考えた上で、子供達の初発の感想をもとに、『なぜ、こんなに悲しい物語なのだろう』という単元を貫く問いを設定した。」と単元構成についての説明がありました。その後、学年団の先生方から「『新見南吉さんは、なぜこんなにも悲しい物語を残したのか。』まで考える子供達を育てたい。」と事前検討で話し合った内容が紹介されました。

筒井教授からは、「今日のごんぎつねの『読み』は、小学校の教師だからこそできる『読み』であった。保護者が家で子供と一緒に物語を読んでも決して到達しないところまで、いざなうことができた授業であった。」と言葉をいただきました。

また、琴陵中学校の先生方からは、「この後の展開がとても気になるので、調整して、引き続き参観に来ます。」という声が聞かれ、ブロックをあげて授業改善に取り組む様子が見られました。



授業研究コンセンサスシート

「ごんの償いの気持ちは、兵十にとどいたのだろうか」の問いに対する考えを、一人学びからみんな学びにつなげている場面